

大会日程

10月7日			10月8日					
10:00	各種委員会(151～155)		経常的研究交流委員会 企画講習会 潜在連合テスト (I A T) (141)					
10:30								
11:00								
12:00		経常的研究交流委員会 企画シンポジウム 司法の場における 「性格」の取り扱 いの現状と展望 (141)	会員総会(231)					
12:30								
13:00	ポスター 発表本館		在籍責任時間 本館2階 3階通路					
14:00	在籍責任時間	I A T体験コーナー (142)	I A T体験コーナー (142)					
15:00	《記念対談》 日本パースナリテイ 心理学会 過去・現在・未来 (メディアホール)					経常的研究交流委員会 企画シンポジウム 教育・指導の実践 における「個性」 (141)		
15:30								
16:00								
16:30	2階3階通路	*大会企画シンポジウム E Q (E I) テスト 現状と展望 (メディアホール)						
17:00								
17:30								
18:00	懇親会(ビッグボックス9階)		2007年度第16回大会は、 北海道の帯広畜産大学です。 (予定会期は2007年8月25日～26日)					
19:00								
20:00								

2007年度第16回大会は、
 北海道の帯広畜産大学です。
 (予定会期は2007年8月25日~26日)

日本パーソナリティ心理学会の 過去・現在・未来

企画・進行	東京富士大学	浮谷秀一
話題提供者	第1代理事長(東京国際大学)	詫摩武俊
	第2代理事長(日本大学)	大村政男
	第3代理事長(同志社大学)	松山義則
	第4代理事長(東洋大学)	杉山憲司

企画意図

日本性格心理学会が、詫摩武俊氏や大村政男氏を中心に誕生したのは1992年の6月でした。その年の11月に山岡淳委員長のもとで日本性格心理学会第1回大会が日本大学文理学部で開催されました。それから毎年1回開催し、今回の大会まで積み上げられてきました。また、2004年4月には、日本パーソナリティ心理学会に名称を変えて現在にいたっています。

そこで、現在の杉山憲司第4代理事長を含め、詫摩武俊第1代理事長、大村政男第2代理事長、松山義則第3代理事長にお集まりいただき、日本パーソナリティ心理学会の「過去・現在・未来」について語っていただくとともに、皆さんとともに当学会の将来を考えてみたいと考え企画しました。過去3代の理事長からは、その当時の学会の様子を語っていただき、当時を振り返りながら今後の日本パーソナリティ学会の目指すべき姿やあるべき姿などを対談形式展開できればと考えております。

会員の年代にかかわらず当学会を知っていただく機会になると思っています。

パーソナリティ研究 ―これまでとこれから― (詫摩武俊)

かつて Charakterologie(性格学)という言葉がドイツ語圏でよく用いられた。大学の講座名にも書物の表題にも使用された。1930年代にドイツに国民社会主義(ナチス)が台頭すると、多数のユダヤ系の学者が国外に移住した。その比率も人数もベルリン大学がもっとも多く、ベルリン大学を中心としたゲシュタルト心理学は衰退したが、ライプツヒ、ゲッティンゲン、ミュンヘン、ヴュルツブルグ大学等の心理研究室はこの時代の政治的影響は相対的に少なく、性格学の観点からの研究も適性の問題などを中心に進められた。Diplom・Psychologi という公的な資格も第二次大戦中に認められた。

わが国では性格という日常的にも安定した言葉が Character に対応する言葉となった。Personality は人格と訳されたが、これには倫理的意味があるのでパーソナリティという言葉がそのまま用いられることもある。しかしまたパーソナリティには一定の役割を担当する人を示すこともあり、仮面という意味が含まれることもある。

性格あるいはパーソナリティについては西洋においても東洋においても古くから関心を持たれ多くの著書が残されている。またこれは個人の識別、個人の形成・発達の問題、異文化・異世代の比較、研究法の問題など心理学と広く関わる大きな問題であり、実験心理学的研究法や外部からの観察だけでは解明できない領域をもっている。

人は自らを対象化できるという特色をもち、各自がそれぞれの歴史をもっている。自らを顧みて言語化して表現しない面もある。長い研究の過程を概観し多様な研究領域の中の自分が選んだテーマがパーソナリティ研究のどこに位置するかを考えながら着実な研究を重ねることを期待したい。

心理学者による心理学(大村政男)

この学会は若手の研究者の意欲によって建設されたので、もう 15 年にもなるがその新鮮さは失われていない。しかし、若手も漸次老骨になり、うっかりすると老獺になる。時勢も変貌してくる。私は、穏健派？なのだが、きょうは獺になって感想を記述しようと思う。

- (1) わが国は心理学では後進国である。SF 映画も外国人が登場してくると真実味を帯びてくるが、論文のなかにも外国の心理学者の名前が出てくると……………らしくなる。海外文化の移入咀嚼を拝しているだけでは寂しい。Big 7 なんていうものを打ち出せないものか。
- (2) 『心理テストはウソでした』という本がある。富山大学の Y・M 教授の著述で、有名な心理テストが有名無実であることを立証している。心理テストで彼の俎上に載らないもの(載せる価値がないほど可笑しいものを含む)がまだたくさんある。手抜き工事はマンションだけではないのだ。
- (3) 推計学的方法は結論を拈出するための有力な道具であるが、曲解や乱用が目立っている。 $r_{.24}(p<.001)$ というようなことで変数間の強い共変関係を力説している研究者が目立っている。 r の信頼性と r の強さが見事に混同されている。
- (4) 心理学ワールドの再編成が又候話題になってきている。APA のようなアンブレラ組織を夢見ているようである。多くの研究者たちは日心や応心を解体すればアンブレラになると思っている。大きな間違いである。心理学ワールドの明治維新になるのである。心理学者の心理学が問われる秋だと思う。

日本パーソナリティ心理学会の現状と展望(松山義則)

大村政男先生が日本性格心理学会理事長であられたあとをついで、1期 3 年間をつとめさせていただいた。その間に、東洋大学、九州ルーテル学院大学、同志社大学でそれぞれの大会が開催された。常任理事のかた、事務局のお世話になり、それぞれの担当理事のもとにおいて学会活動が活発にすすめられた。ことに特記すべきことは学会の名称を日本性格心理学会から現在の日本パーソナリティ心理学会に変更する論議に入ったことである。そして会員の大方の支持を得て名称変更が成立する方向がかたまった。

その名称変更は、広くまた隣接領域との関係を密にしてパーソナリティ研究を発展させようという意図があり、そこに日本パーソナリティ心理学会の新しい将来への展望があったといえることができる。

パーソナリティ研究の分野はパーソナリティの特性・類型論、構造論、力動論などの各領域への拡がりがあり、ことに性格学の研究と社会心理学研究との深い関係がある。組織心理学、産業心理学などとの接点が展開するであろう。さらに研究課題はパーソナリティが統合体としての個性研究が深められねばならない。差異心理学的研究以前の絶対的個性性を中核とする個性の内部観察とパーソナリティの了解心理学的接近と記述的方法とを併せ用いた領域が展開すると考える。

パーソナリティ研究／学会の近未来(杉山憲司)

1) なぜ何時までも、血液型なのか ― パーソナリティ観を求めて一人々の、素朴なパーソナリティ観に学会ないし研究者は責任がないのだろうかと考えることがある。卒論のテーマに持ち出されたりするとがっかりする。遺伝か環境かの二分法、知能のg因子を持ち出されても同様である。どうもこの手の誤解・単純化が広い意味でのパーソナリティに関係していることが多過ぎるように思う。

2) パーソ心の発展と活性化 ― 2、3年を振り返って一機関誌「パーソナリティ研究」の年3号化と電子投稿への移行があり、これらは院生会員などの若い研究者の発表意欲の強さに支えられている。これに対して、「大会発表賞による大会の活性化」「クロス・ロード・パーソナリティ叢書シリーズの刊行準備」「英文教科書の翻訳企画」を進めてきた。

3) パーソ心の近未来に向けて次期キャビネットメンバーには、現在進行中の「EAPPやARP等との国際連携に向けた委員会」「学会内／会員に向けた広報と学会外に向けたHPの一体化」「時々の課題に対応できる機動的なプロジェクトチーム」など、し残した課題を伝えたい。

EQ (EI) テスト

現状と展望

企画・司会	東京富士大学教授	浮谷 秀一
話題提供者	モルゲン人材開発研究所所長	澤田 富雄
	株式会社イー・キュー・ジャパン	田辺 康広
	筑波大学	内山 喜久雄
	(株)日本能率協会マネジメントセンター	
	アセスメント・リサーチセンター	藤原 美智子
指定討論者	日本大学	大村 政男

企画意図

EQ (Emotional Quotient) ということばが初めて世に出たのは、1995年10月9日号雑誌『TIME』の表紙です。そこには大きな文字で「What's your EQ?」と描かれ、「人生で成功できるかどうか、本当の意味で聡明な人間かを決めるのは、IQではなく、EQの高さである」という内容の記事が特集されていました。その記事のもとになったのが、1995年に出版された『Emotional Intelligence —Why it can matter more than IQ—』(著者: ゴールマン) です。その著書は日本でも翻訳され、『EQ—こころの知能指数』という書名で出版されています。ここまでの経過からお分かりいただけると思いますが、EQとEIということばはほぼ同義語として使われています。

そのEQ (EI) をIQ (Intelligence Quotient ; 知能指数) と同じように測定しようという試みがなられてきました。そこで、現在標準化されて流通している4種類のEQ (EI) テストにかかわった方々にその作成の経緯も含めて紹介していただくと共に今後EQ (EI) テストがどのようになっていくかをお話していただこうと考えています。

話題提供者には、『nEQ』の作成にかかわったモルゲン人材開発研究所の澤田富雄先生、『EQI』の作成にかかわったEQジャパンの田辺先生、『EQS』の作成にかかわった内山喜久雄先生、『EI Gate』の作成にかかわった藤原美智子先生をお願いし、それぞれのテストについてお話をしていただくことになっています。それらのお話に対して指定討論者の大村政男先生から質疑やご意見を伺う予定です。その後、議論の輪をフロアーに広げ、EQ (EI) テストに興味のある方や疑問のある方を含めた活発な議論を展開したいと考えています。

このシンポジウムにおいては、EQ (EI) テストの問題点を明らかにするというよりは、今後EQ (EI) テストがどのようになっていくか、あるいはどのようにならなければならないかを議論の中心にしたいと思っています。

「人間力」としてのEQ（澤田 富雄）

昨今、モラルハザードに起因する不祥事が産業界のみならず政治・行政・教育の世界にも及んでいる。事故や凶悪犯罪の多発や自殺者の急増も、背景には「倫理観」「責任感」の欠如や「自己コントロール」の不足が根底にあると考えられる。毎日の生活が幸せて、仕事も順調で、職場の人間関係がうまくいくことは万人の願いである。しかし、IQは高いのに対人関係でつまづく社員も少なくない。人生の明暗が分かれるのは、「やさしさ・思いやり・協調性・奉仕の精神」など、IQ以外の能力項目が重要な役割を果たしているからである。新しく開発された「nEQ」というアセスメントは、EQを「自己対応能力」「他者対応能力」「社会性」「精神性」の4領域に分けて、「人間力」としてトータル（広義）に把握しており、「自己理解」「自己認識」を深める支援ツールとして有効である。学生版と社会人版の2種類がある。客観的な自己理解が「自己開発」「キャリア開発」のベースになるので、「社会性」（社会人として生きる能力）と「精神性」（こころ豊かに生きる能力）が含まれているのが類のない強みであり、同時に「ワンポイント・コーチング」で能力向上の処方箋も提示しているのがnEQの特徴である。

EQI（田辺 康広）

ネットリサーチの結果によると、20～30代のビジネスパーソンのうち、「EQを知っている・理解している」と回答した人は13%、「言葉は知っているが、その内容はよく知らない」と答えた人は28%という結果であった。

EQという概念は、現在イエール大学心理学部カレッジ長を務めるピーター・サロベイ博士と現ニュー・ハンプシャー大学教授のジョン・メイヤー博士によって1990年に初めて提唱された。彼らの定義するEQ（Emotional Intelligence Quotient）は、組織における対人関係を円滑にしたり、メンバー同士の相互理解を深めるために、「自分や他者の感情を理解したり、調整できる能力」のことである。

両博士が多数のビジネスパーソンを対象に行なったフィールドワークによると、IQの高い人が必ずしもビジネス社会で成功するわけではないという結果が出た。それどころか、きわめてIQが高く、有名大学を優秀な成績で卒業したにもかかわらず、ビジネス社会ではまったくといっていいほどの不首尾に終わったケースさえ見られた。

ビジネス社会で成功するためには、IQだけでなく、ほかの違う能力が必要なのだろうかと疑問を抱いた両博士は、ビジネスで一定の成功を収めた人たちを対象に調査を実施した。その結果、明らかになったのが「ビジネスで成功した人は、対人関係能力にきわめて優れている」という事実だった。そこからEQ理論が生まれた。

そのEQを測る検査は米国でも日本でもいろいろ開発されているが、株式会社イー・キュー・ジャパンが開発したEQIというアセスメントツールを紹介しよう。

EQIではEQを自己の内面に関する側面（心内知性）、自分が他者に働きかける側面（社会的知性）、他者の感情を把握することで、その場の状況を把握する側面（状況判断知性）の3つの側面から測定している。そしてさらに、それぞれの知性をさらに8つの能力と24の素養に細分化することによって、より具体的に受検者の行動の傾向を測ろうとしている。

EQS (内山 喜久雄)

内山(1997)は当初、EQ 測定法の成立を目指し、松田英子氏（江戸川大学）の協力を得て、EQ を「対自己」、「対他者」に大別し、両者に各 5 個、合計 10 個の EQ ファクターを配するとともに、さらに各 EQ ファクターに各 2 個の下位ファクターを配して、結局、計 20 個の下位ファクターから成る「EQ テスト」試案を構成した。この試案が 1 つの契機となって完成したのが EQS(Emotional Quotient Scale)(2001)である。

EQS では自己(intrapersonal)、対人(interpersonal)、状況(situational)の 3 対応領域について各 3 個、合計 9 個の対応因子（例：自己洞察）が、さらに、各対応因子には 2 ないし 3 個、総計 21 個の下位因子（例：感情察知）が配置された構造になっている。EQS の特色としては emotional intelligence 理論を基盤にしていること、3 種の対応領域での EQ 力の解明や把握が容易であること、パーソナリティ研究のほか医療、産業、福祉、教育その他各種の領域で多大の寄与が期待できること、実施時間が 5 分程度と短いこと、などが揚げられる。

内山喜久雄 EQ—その潜在能力の伸ばし方 講談社 1997

内山喜久雄、島井哲志、宇津木成介、大竹恵子 EQS 実務教育出版 2001

「ビジネス界における EI の測定と活用—『EIGate』の開発過程と事例から—」

EIGate (藤原美智子)

EI は、その応用の可能性の広さに加え、概念の多様性が特徴の 1 つであると言えます。

我々は、組織が高い生産性を上げながら、所属する個々人が共に喜び合い、一体感を味わうことができる「人と組織が活性した状態」を実現するためには、EI が大変重要であると考えます。EI を発揮することで、社員同士が単なる情報のやりとりだけでなく、感情や意思も交わすことができ、人間的なコミュニケーションが可能になると考えたのです。そこで、企業人の EI を測定するツールの開発に着手し、2002 年に『EIGate』をリリースしました。『EIGate』は、対象者が結果を職場で活用できることを第一目的として、対象者が理解しやすいようにディメンションを構成しました。わたくしからは、この『EIGate』の開発過程と、リリース後 4 年間で様々な活用された事例についてご報告したいと思います。

また、企業人の対人関係上の特徴を把握するための測定ツールは、EI に限らず多数存在します。それらとの EI 測定ツールの違いについて考察し、EI の独自性とその効用と限界、今後の展望についても意見交換できれば幸いです。

司法の場における「性格」の取り扱いの現状と展望

企画者：日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会

話題提供者：荒川 歩（名古屋大学）

「判例に見る「性格」の取り扱いの現状」

松江 仁美（東京弁護士会）

「裁判員制度と悪性格排除ルール」

黒沢 香（東洋大学）

「パーソナリティ心理学者から見た裁判」

指定討論者：杉森 伸吉（東京学芸大学）

司会者：原島 雅之（千葉大学）

<企画趣旨>

一般市民が陪審員になる英米では「悪性格排斥ルール」と呼ばれる規則によって、性癖や性格、前科などを有罪の証明に用いることは原則的にできない。他方、職業裁判官が「事実認定」を行う日本の裁判では、これらの情報が当然のごとく法廷に出され、有罪認定に向け状況証拠的に使われたり、量刑判断の根拠にあげられたりすることがごく普通に行われている。マスメディアも、物的証拠や事実関係の確認より、身上や経歴、性格など被疑者・被告人「像」の報道に重点をおいているようである。このように、心理学的な概念のとらえ方や使い方は、社会・文化そして分野や現場によって大きく異なる。

このシンポジウムでは、わが国の司法における「性格」の扱われ方に着目し、それがどのように裁判で用いられているのか、またパーソナリティの研究者が法の実務家に何を提供できるのかを考えてみたい。

2004年に「裁判員の参加する刑事裁判

に関する法律」が成立し、2009年までに裁判員制度がスタートすることが決定している。それによって今後我々にとって裁判の場がより身近なものになることが予想される。

本シンポジウムを通して、法とその実務を切り口に、パーソナリティ心理学における重要な概念を見直し、心理学とその概念のより妥当で適正な理解と利用という点で、実務の現場やより広い社会において、心理学者は何を貢献できるのか議論したい。

荒川 歩（名古屋大学）

「判例に見る「性格」の取り扱いの現状」

判例の中で「性格」という言葉がどのような文脈で用いられているかを明らかにすることを目的とした。具体的な方法としては、裁判所の判例検索システムを用いて、

平成8年から平成17年までの刑事事件の判例において、「性格」という言葉が用いられたケースを検索し、それらの判例において「性格」という言葉がどのように用いられているかを分類した。検索の結果、193件の事件が該当した。それらの事件において現れた「性格」という言葉を分類したところ、「被告人の性格を指摘して量刑判断の参考にするもの」、「被害者の性格に関するもの」、「被告人・被害者以外の人物の性格を記述することで、事件の様子や被告人の判断の推察の理解を助けようとするもの」、「精神鑑定などの専門家証言の結果を参照したもの」など、さまざまな使用の形式が認められた。

このような調査により、司法場面において「性格」という概念がどのように使用されているのか、その現状が明らかになると思われる。シンポの話題提供の中では、分析の結果を中心に報告する。

松江 仁美（東京弁護士会）
「裁判員制度と悪性格排除ルール」

日本の刑事裁判では、アメリカのような悪性格排斥ルールと呼ばれる明確なルールがあるわけではないのですが（悪性格立証の禁止という似たようなルールはあります）、「性格」という点がもろに審理の対象となることがむしろあってはならないという方向で今まで裁判は行われてきたように思います。実際は性格が投影されていることはまちがいないにしても、情状判断についても、できるだけ、家族構成、被告人の経歴、現在の被告人の決意、心情、反省の度合い、前科の状況、就職先の状況などなど、「性格」ではなく、おかれている客観的な状況から判断をしてきたという形は残っていたように思います。「○○○○という行動を見る限り、反省の色は薄い」などというように。

しかし、裁判員の関与が始まると、そのあたりの技術を望むべくもないので、「性格が粗暴そうだ」とか「下品だから」だとか、「優しそうだから大丈夫かも…」などというような評価が飛び交うのかもしれないですね。それがいかなる問題をはらんでくるのかは今後の課題で、実際には実施して見ないとつかないということはありません。

黒沢 香（東洋大学）
「パーソナリティ心理学者から見た裁判」

日本の裁判では、「実体的真実」の解明を錦の御旗に、裁判官が事実認定を行ってきた。認定されるのは、具体的に何が起きたのかという事実の問題にとどまらない。被告人や被害者など、関係者の性格、態度、欲求、動機から思考の具体的内容まで、事実として判決で認定されている。

そのベースになっているのが、性格が実体として人間のなかに存在するという考え方であり、人間行動は状況を超えて一貫しているという素人心理学的信念である。そのような形の事実認定は、素人である一般大衆には受け入れられやすいかも知れないが、科学的な根拠を欠いているから、良くても無意味で、悪くすれば判断を誤る原因になる。有力な証拠が少なく争われている事件ではなおさらである。有罪を前提に性格を考え、それを根拠に有罪にしかねない。同様の問題が精神鑑定にもあるし、心理プロファイリングも状況要因を軽視した性格や行動の考え方を前提にしていることを指摘したい。

教育・指導の実践における「個性」

～スポーツ指導の実践において「個性」はどのように捉えられるか～

企画：日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会

司会：今尾真弓（名古屋大学）

話題提供者：永山貴洋（東北大学大学院）

梅崎高行（九州ルーテル学院大学）

山中教子（(株) サウンド球貴代表，東京学芸大学）

指定討論者：速水敏彦（名古屋大学）

尾見康博（山梨大学）

<企画趣旨>

昨今、スポーツや教育などの「指導」の実践現場においては、子どもや選手の「個性」を重視したかかわりの必要性が認識されてきている。殊にスポーツ指導の実践においては、「指導」に代わって、コーチング(coaching: 指導する立場にある人が、指導される人の自発的行動の促進や目的達成の支援を行うことを指し、相手の自主性や動機づけを高めること)という言葉を用いることで、選手の「個性」を引き出し、生かすことの重要性を強調する流れがある。

この文脈においては、指導する立場にある人は、子どもや選手の「個性」という問題と何らかの形で向き合わなければならないだろう。では、コーチングの現場で「個性」は実際にはどのように捉えられ、扱われているのだろうか？それは、パーソナリティ心理学が対象としてきた「個性」の捉え方とどう違うのだろうか？また、そこで行われる包括的・総合的な人間理解の行為は、心理臨床において「アセスメント」と呼ばれる行為とどのように違うのだろうか？

このように、現場における「指導」「教育」というコンテキストにおける「個性」に焦点を当てたとき、指導する者－される者という「関係性」を無視することができないであろう。「個性」は、指導者との関係性の中で立ち現れるものであるとも

言える。このような「個性」の実際には、これまであまり目が向けられてきていない。

そこで本企画においては、指導というコンテキスト、特に、「指導する者」－「される者」の関係性に立ち現れるスポーツ選手の「個性」に焦点を当てる。指導者は個々の選手の「個性」をどのように捉えているのだろうか、またそれは指導実践の中で実際に、どのように取り扱われているのだろうか、また、選手側から見た指導者の「個性」という問題はどうか。本シンポジウムでは、「個性」をめぐるこれらの問題について、実践現場からの報告をもとに考えたいと思う。さらに、スポーツ指導の実践現場における「個性」と、パーソナリティ心理学における「個性」とを照らし合わせ、改めて「個性とは何か」を議論し、考える機会としたい。

<登壇者紹介>

本シンポジウムでは、様々な実践現場からの話題提供を3氏にお願いしている。

永山貴洋氏は、スポーツ選手の運動学習過程に関心をお持ちである。さまざまなスポーツの指導の実践場面において、観察やインタビューといった質的手法を駆使しながら、身体動作や身体知の習得過程について研究されている。

梅崎高行先生は、教育の実践場面における指導

者の熟達化や実践知の生成過程、また、指導を受ける側の生徒・選手の学びや育ちの過程に関心をお持ちである。サッカー指導についてのアクション・リサーチや、選手の動機づけなどについての研究をされているだけでなく、ご自身もサッカー指導者という立場である。

山中教子氏は、卓球の複数種目で世界チャンピオンになられた経験をお持ちである。主な戦歴は、63年、65年、67年卓球世界選手権大会日本代表、63年、67年世界選手権女子団体優勝、67年混合ダブルス優勝、昭和39年・41年全日本選手権シングルス優勝などである。その後指導者となり、長年のコーチング経験を経て、独自のARP理論(卓球における身体動作の理論)を打ち出された。

指定討論は、パーソナリティという観点からの議論を2名にお願いする。

速水敏彦氏は、パーソナリティ心理学、なかでも動機づけについての理論的、実証的研究の第一人者である。スポーツに関しては、自伝的記憶と現在のスポーツへの動機づけについても研究を実施されている。「心の教育」にも関心をお持ちであり、著書「他人を見下す若者たち」がベストセラーとなったのは、まだ記憶に新しい。

尾見康博氏は、心理学論・心理学方法論と環境教育、ソーシャル・サポート、対人ネットワークといった多様な側面からの青年心理学がご専門である。特に本シンポジウムに関しては、スポーツ選手への教育と社会文化的背景の関連を検討したご研究がある。

スポーツ「教育」「指導」という具体的な実践に絞り込んで、個性を巡る、パーソナリティ心理学の視座からの建設的な議論を目指したい。そのために、フロアからの積極的なご発言をお願いする。

<話題提供・発表概要>

「選手の個性を理解し、動作のこつをつかませるコーチング」

永山貴洋

少年野球や体操といったスポーツの練習場面に

密着して、指導者及び選手の運動学習過程について研究している立場から、運動の「こつ」と「個性」という問題を取り上げる。運動の「こつ」は教えにくく、つかみにくい。動作の感覚は選手により感じ方が大きく異なる。それゆえ、「個性」を意識しない決まりきった教え方では選手に「こつ」をつかませることは困難である。本シンポジウムでは、優れた指導者がどのようにして選手の「個性」を理解し、「こつ」を指導しているのか、について触れたい。

「指導者の働きかけと可視化される個性」

梅崎高行

発表者は、大学サッカー一部の指導をしている。競技スポーツゆえ、試合に勝つことが目的となる。選手はチーム内・間の競争にさらされている。このような文脈における選手の個性は、あくまで相対値としてあり、指導者からの働きかけ、置換や転換の示唆によって可視化される。一般に指導者は、このような働きかけを動機づけとよび、正当化する。しかし、実際に選手の動機づけを高め、目的に向けて機能しているか、指導者が自覚することは難しい。本発表では、指導の実践を自省し、目的に応じた個性の捉えを議論する、一つの材料を提供したい。

「アープ (ARP) 理論から見た個性とコーチング」

山中教子

卓球での技術指導では、多かれ少なかれ、指導者が正しいと思う型に選手をはめることが往々にして見られる。ARP理論では、軸(Axis)、リズム(Rhythm)、姿勢(Posture)の基本的な原理に、複雑な卓球の動きを集約させて指導するが、そうすることで選手の個性がよりよく発揮され、伸び伸びと自分らしいプレーができる。これまでさまざまな国の、さまざまなレベルの選手や一般愛好家の指導をする中で、どのようにその人の個性を引き出してきたか、コーチングの実践経験に

者の熟達化や実践知の生成過程、また、指導を受ける側の生徒・選手の学びや育ちの過程に関心をお持ちである。サッカー指導についてのアクション・リサーチや、選手の動機づけなどについての研究をされているだけでなく、ご自身もサッカー指導者という立場である。

山中教子氏は、卓球の複数種目で世界チャンピオンになられた経験をお持ちである。主な戦歴は、63年、65年、67年卓球世界選手権大会日本代表、63年、67年世界選手権女子団体優勝、67年混合ダブルス優勝、昭和39年・41年全日本選手権シングルス優勝などである。その後指導者となり、長年のコーチング経験を経て、独自のARP理論(卓球における身体動作の理論)を打ち出された。

指定討論は、パーソナリティという観点からの議論を2名にお願いする。

速水敏彦氏は、パーソナリティ心理学、なかでも動機づけについての理論的、実証的研究の第一人者である。スポーツに関しては、自伝的記憶と現在のスポーツへの動機づけについても研究を実施されている。「心の教育」にも関心をお持ちであり、著書「他人を見下す若者たち」がベストセラーとなったのは、まだ記憶に新しい。

尾見康博氏は、心理学論・心理学方法論と環境教育、ソーシャル・サポート、対人ネットワークといった多様な側面からの青年心理学をご専門である。特に本シンポジウムに関しては、スポーツ選手への教育と社会文化的背景の関連を検討したご研究がある。

スポーツ「教育」「指導」という具体的な実践に絞り込んで、個性を巡る、パーソナリティ心理学の視座からの建設的な議論を目指したい。そのために、フロアからの積極的なご発言をお願いする。

<話題提供・発表概要>

「選手の個性を理解し、動作のこつをつかませるコーチング」

永山貴洋

少年野球や体操といったスポーツの練習場面に

密着して、指導者及び選手の運動学習過程について研究している立場から、運動の「こつ」と「個性」という問題を取り上げる。運動の「こつ」は教えにくく、つかみにくい。動作の感覚は選手により感じ方が大きく異なる。それゆえ、「個性」を意識しない決まりきった教え方では選手に「こつ」をつかませることは困難である。本シンポジウムでは、優れた指導者がどのようにして選手の「個性」を理解し、「こつ」を指導しているのか、について触れたい。

「指導者の働きかけと可視化される個性」

梅崎高行

発表者は、大学サッカー一部の指導をしている。競技スポーツゆえ、試合に勝つことが目的となる。選手はチーム内・間の競争にさらされている。このような文脈における選手の個性は、あくまで相対値としてあり、指導者からの働きかけ、置換や転換の示唆によって可視化される。一般に指導者は、このような働きかけを動機づけとよび、正当化する。しかし、実際に選手の動機づけを高め、目的に向けて機能しているか、指導者が自覚することは難しい。本発表では、指導の実践を自省し、目的に応じた個性の捉えを議論する、一つの材料を提供したい。

「アープ (ARP) 理論から見た個性とコーチング」

山中教子

卓球での技術指導では、多かれ少なかれ、指導者が正しいと思う型に選手をはめることが往々にして見られる。ARP理論では、軸(Axis)、リズム(Rhythm)、姿勢(Posture)の基本的な原理に、複雑な卓球の動きを集約させて指導するが、そうすることで選手の個性がよりよく発揮され、伸び伸びと自分らしいプレーができる。これまでさまざまな国の、さまざまなレベルの選手や一般愛好家の指導をする中で、どのようにその人の個性を引き出してきたか、コーチングの実践経験に

「潜在連合テスト (IAT)」講習会

パーソナリティ測定に関してはこれまでに様々な手法が提案されてきましたが、実施や解釈の容易さなどの点から尺度などを用いた質問紙が主流となっております。しかし質問紙法においては自己報告にまつわるいくつかの問題(e.g. 回答の歪み)があり、それらをうまくクリアーするのはしばしば困難とされています。近年、回答者に無自覚な回答を求めることのできる様々な潜在的測定ツールが考案され、自己概念や態度、ステレオタイプやパーソナリティなどといった分野への応用が試みられてきています。中でも Greenwald らが開発した潜在連合テスト (Implicit Association Test) はその測定対象の多様さや実行の容易さなどから多くの研究に用いられ、我が国においてもその注目は高まりを見せております。本邦でも既にワークショップや研究発表などが多数行われてきておりますが、本講習会ではこれから IAT を用いて研究を行なってみるという方や潜在的測定法に興味のあるという方を対象として、理論的側面というよりも実際に用いる際に役立つより実践的な内容を中心に、PC で実験ソフト (Inquisit) の実演や PC を用いなくてもできる Paper & Pencil 版の IAT の実演などを交えながら紹介したいと思います。

- 講義および実演：小林知博（青山学院女子短期大学）・原島雅之（千葉大学自然科学研究科）
 - ・ 潜在連合テスト (IAT) の概要
 - ・ 実験ソフト (Inquisit) を用いた IAT の実施方法の紹介
 - ・ 結果の集計や分析方法
 - ・ Paper & Pencil 版 IAT の実演など

< IAT に関する参考文献 >

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the Implicit Association Test to Measure Self-Esteem and Self-Concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 1022-1038.

潮村公弘・村上史朗・小林知博 (2003). 潜在的社会的認知研究の進展—IAT(Implicit Association Test)への招待— 信州大学人文学部人文科学論集 (人間情報学科編), 37, 65-84.

Millisecond Software 社 <http://www.millisecond.com/> (Inquisit の体験版がダウンロードできます)

IAT 日本語版 Web サイト <https://implicit.harvard.edu/implicit/japan/index.jsp> (Web 上で体験できます)

※ IAT (Inquisit) 体験コーナーのお知らせ

実際に PC 上で Inquisit を使って IAT やその実施について体験していただくべく、大会本部のご厚意で体験コーナーを設置させていただけることとなりました。PC で IAT について触れていただく他、IAT を用いた研究についての相談や IAT についての初歩的な質問等につきましてもできるだけ対応できたらと考えております。スペースや設置できる PC の台数には限りがありますので皆様のご要望に完全にはお答えできないかもしれませんが、どうかお気軽にお立ち寄りいただければと思います。設置場所や時間につきましては大会当日の掲示をご覧ください。

ポスター発表

- P- 1201 女子大生の愛着タイプと自立、そしてパーソナリティ
○ 橋本 泰子 桜美林大学大学院
雲井 千香子 桜美林大学大学院
- P- 1202 自己愛人格傾向と自我状態との関連について
○ 小西 瑞穂 同志社大学大学院文学研究科
佐藤 豪 滋賀医科大学精神医学講座
橋本 宰 同志社大学文学部
- P- 1203 両親の養育態度が大学生の完全主義に与える影響についての検討
○ 中川 明仁 同志社大学文学研究科
佐藤 豪 同志社大学文学部
- P- 1204 対人場面におけるあいまいさへの非寛容が新入学生の適応過程に及ぼす影響(4)
ー学年の差異による経時的変化の検討ー
○ 友野 隆成 同志社大学文学部
橋本 宰 同志社大学文学部
- P- 1205 高齢者の特性的自己効力感および認知的評価と精神的健康との関連
～地域別の比較の観点から～
○ 西荻 恵 同志社大学文学研究科
橋本 宰 同志社大学文学部
- P- 1206 重要他者に対する再確認傾向と重要他者の行動および感情の推測との関連(2)
ーKJ法とテキストマイニングによる検討ー
○ 勝谷 紀子 日本大学文理学部・日本学術振興会
坂本 真士 日本大学文理学部
- P- 1207 地域におけるサポートとうつ・自殺念慮の関連
○ 亀山 晶子 日本大学大学院文学研究科
坂本 真士 日本大学文理学部
- P- 1208 性役割パーソナリティ(BSRI)の個人差に及ぼす遺伝効果と環境効果の性差
○ 佐々木 掌子 慶應義塾大学大学院社会学研究科
山形 伸二 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会
敷島 千鶴 慶應義塾大学大学院社会学研究科
安藤 寿康 慶應義塾大学文学部
- P- 1209 双生児法による因果の方向性の検討
○ 山形 伸二 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会
高橋 雄介 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会
木島 伸彦 慶應義塾大学心理学研究室
安藤 寿康 慶應義塾大学文学部
- P- 1210 拒否に対する感受性と対人ストレスへのコーピングとの関連
小川 万理子 慶應義塾大学大学院社会学研究科

- P- 1211 現代青年の社会意識 ―20年前の青年との比較を通して―
○ 桑村 幸恵 愛知学院大学大学院総合政策研究科
杉山 佳菜子* 愛知学院大学大学院総合政策研究科
二宮 克美 愛知学院大学大学院総合政策学部
- P- 1212 目標設定と主観的幸福感に関する検討
田中 知恵 昭和女子大学人間社会学部
- P- 1213 話者の権威認知と話者印象評定 ―言語スタイルとの関係―
海上 智昭 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- P- 1214 大学生におけるEQSとCPI得点間の相関的研究
大野木 裕明 福井大学教育地域科学部
- P- 1215 ベテラン保育士の自我状態およびストロークの与え方
―経験の浅い保育士と比較して―
宮沢 紀江 清泉女学院短期大学
- P- 1216 女子学生の自己についての語り ―文化的スクリプトとの関連―
向田 久美子 清泉女学院大学人間学部
- P- 1217 青年期における自己評価の構造と機能
―高校生の多側面的自己評価と抑うつ感との関連―
眞榮城 和美 清泉女学院大学
- P- 1218 若者における一人称への意味づけに関する検討(2)
―社会的アイデンティティの諸相にみる一人称詞の機能的意味について―
○ 大和田 智文 専修大学大学院文学研究科
下斗米 淳 専修大学文学部
- P- 1219 ネガティブな「若者イメージ」を持つ若者は“黒い羊”を切り捨てるか？その2
―対人的志向性、クリティカル・シンキング、およびプチナショナリズムの影響―
大石 千歳 東京女子体育大学体育学部・同短期大学
- P- 1220 ポジティブ・イリュージョンとオプティミズム、健康との関係に関する基礎研究
園田 明人 静岡県立大学国際関係学部
- P- 1221 演奏不安はパフォーマンスを低下させるか
―状況別演奏不安傾向とパフォーマンスの関連―
吉江 路子 東京大学大学院総合文化研究科

- P- 1301 カウンセラー志望者の特性、及び苦悩の体験に対する態度
上野 まどか 明治学院大学大学院心理学研究科
- P- 1302 アタッチメントが他者の特性判断に与える影響 ―敵意性と友好性に着目して―
島 義弘 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- P- 1303 友人関係場面における感情経験と自律的な動機づけとの関連
岡田 涼 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- P- 1304 考え込む傾向が抑うつ持続に与える影響(3)
―反応スタイルと認知的評価との関連―
松本 麻友子 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- P- 1305 中学生の子どもを持つ親の全体的自己価値の特徴
―父親、年齢、経済状況との関連と2年間の変化―
山本 ちか 名古屋文理大学短期大学部
- P- 1306 大学生の夢信仰と情報処理スタイル
○ 白石 みな美 サンコーインダストリー株式会社
浅原 千恵 上智大学
伊澤 冬子 上智大学大学院
明田 芳久 上智大学
- P- 1307 人格測定における社会的望ましさ反応の研究
―受検者要因と項目の社会的評価観からのアプローチ―
河内 和直 立正大学大学院心理学研究科
- P- 1308 短大卒業生の職業適性と短大教育に関する研究
武藤 玲路 長崎女子短期大学
- P- 1309 摂食障害患者の特性に関する研究
○ 前川 浩子 金沢学院大学文学部
Kathleen Pike Department of Psychiatry, Columbia
- P- 1310 RSVP課題を用いた注意バイアスの測定方法の検討
○ 松本 圭 金沢工業大学基礎教育部
沢田 晴彦* 石川県知的クラスター創成事業
- P- 1311 自己評価の高低および安定性と劣等感の関連
広田 千織 筑波大学人間総合科学研究科
- P- 1312 育児意識に基づいた乳幼児を持つ父親タイプにみられる特徴の検討
照井 裕子 中央大学大学院文学研究科
- P- 1313 状況別対人不安と自己呈示の関係
万代 ツルエ 甲南女子大学大学院人間科学総合研究科

P- 1314 女子学生の心理社会的発達課題と風景構成法

鷲岳 寛 青森明の星短期大学

P- 1315 罪悪感の測定に関する問題

大西 将史 神戸大学大学院総合人間科学研究科

P- 1316 自己愛と自尊感情が集団活動の自己評価および成員評価に及ぼす影響

—2つの自己肯定感の対比—

小塩 真司 中部大学人文学部

P- 1317 九州人はどんな性格か 一渡邊徹『旧新人国記』刊行60年を記念して—

○ 大村 政男 日本大学

浮谷 秀一 東京富士大学

P- 1318 中学生の学校生活要因に対する重要度認知・評価得点のズレと学校への心理的適応

岡田 有司 中央大学大学院文学研究科

P- 1319 自傷行為を自己への攻撃性として捉える試み

山口 高弘 東京国際大学臨床心理学研究科

P- 1320 人格障害をモデルにしたパーソナリティ検査に関する研究(3)

—対人態度とパーソナリティ・スタイルについて—

中澤 清 関西学院大学文学部

P- 1321 大学生の自閉症スペクトラムに関する研究(1)

松田 美登子 東京富士大学学生相談室

P- 2201 中学生の状態共感と特性共感、表情認知の関係(1)

- 登張 真稲
- 大山 智子 白百合女子大学大学院
- 番場 あやの 昭和女子大学大学院

P- 2202 中学生の状態共感と特性共感、表情認知の関係(2)

- 大山 智子 白百合女子大学大学院
- 登張 真稲
- 番場 あやの 昭和女子大学大学院

P- 2203 中学生の状態共感と特性共感・表情認知との関係(3)

ー状態共感の程度と表情認知との関係ー

- 番場 あやの 昭和女子大学大学院
- 登張 真稲
- 大山 智子 白百合女子大学大学院

P- 2204 自己開示および自己呈示とふれあい恐怖の関係

- 東 奈々子 名城大学人間学部
- 榎本 博明 名城大学人間学部

P- 2205 コミュニケーション力尺度の信頼性と妥当性

- 榎本 博明 名城大学

P- 2206 自己概念の複雑性とライフイベント

- 加藤 清佳 名城大学人間学部
- 榎本 博明 名城大学人間学部

P- 2207 Big Fiveと自己愛的脆弱性

- 中山 恵 名城大学人間学部
- 榎本 博明 名城大学人間学部

P- 2208 自己効力感の形成要因と将来展望との関連

- 宮嶋 いずみ 名城大学人間学部
- 榎本 博明 名城大学人間学部

P- 2209 電子ブレインストーミングのアイデアの生産性ー匿名性とシャイネスの効果の検討ー

- 堀内 由樹子 お茶の水女子大学大学院人間研究科
- 近江 玲* お茶の水女子大学大学院人間研究科

P- 2210 携帯電話を利用した援助行動の内容の検討

- 松尾 由美 お茶の水女子大学大学院人間研究科
- 赤坂 瑠以 お茶の水女子大学大学院人間研究科

P- 2211 社会性育成に対する親と教員の意識調査

- 田島 祥 お茶の水女子大学大学院人間研究科
- 松尾 由美 お茶の水女子大学大学院人間研究科

- P- 2212 携帯電話使用量が中学生・高校生の親子関係に及ぼす影響
赤坂 瑠以 お茶の水女子大学
- P- 2213 青年期の抑うつ・不安・強迫の要因としての同一性混乱
金 美伶 お茶の水女子大学人間文化研究科
- P- 2214 大学卒業後のキャリア選択と主観的幸福感の関連
松浦 素子 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- P- 2215 ネット使用が高校生のソーシャルサポートに与える影響-ツール別ネット使用-
○ 安藤 玲子 お茶の水女子大学人間文化研究科
高比良 美詠子 メディア教育開発センター
- P- 2216 自尊感情の変動性と心理的不適応との関連
○ 阿部 美帆 筑波大学人間総合科学研究科
今野 裕之 目白大学人間社会学部
- P- 2217 自己卑下呈示と精神的健康の関連性に及ぼす文化的離反傾向の仲介効果
吉田 綾乃 東北福祉大学総合福祉学部
- P- 2218 パーソナリティ特性語への反応時間における個人内変動に関する研究
—個人内変動得点における因子構造と質問紙への回答傾向—
○ 佐藤 恵美 白百合女子大学大学院
松田 浩平 文京学院大学人間学部
- P- 2219 職業志向性と自己統制感による主要性格5因子の差異
○ 松田 浩平 文京学院大学人間学部
佐藤 恵美 白百合女子大学大学院
- P- 2220 完全主義と自己への攻撃性との関連 —ネガティブな反すうを媒介として—
○ 斉藤 路子 目白大学大学院心理学研究科
今野 裕之 目白大学人間社会学部
- P- 2221 児童の関係性攻撃における自己評定と他者評定
○ 勝間 理沙 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科
山崎 勝之 鳴門教育大学学校教育学部

P- 2301 罰の回避と報酬への接近の感受性を測定する3尺度の比較

- 高橋 雄介 東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会
- 繁枘 算男 東京大学大学院総合文化研究科

P- 2302 モノの心理的機能への期待

ー所有物の心理的機能への期待はコミュニケーションの自信につながるかー

- 安井 理紗 大阪大学大学院人間科学研究科
- 大坊 郁夫 大阪大学大学院人間科学研究科

P- 2303 KiSS-18の中国の大学生への適用

- 毛 新華 大阪大学大学院人間科学研究科
- 大坊 郁夫 大阪大学大学院人間科学研究科

P- 2304 小学生における問題行動の規定要因(2) ～各問題行動の規定要因の検討～

- 川俣 英之 大阪大学大学院人間科学研究科
- 大久保 智生 香川大学教育学部

P- 2305 コレスポネンズ分析によるパーソナリティ観と性格諸尺度の関連

ーNEO-PI-R、TCI240、新版TEGの下位尺度因子分析

- 小山 純 東洋大学大学院社会学研究科
- 杉山 憲司 東洋大学社会学部

P- 2306 Big Five性格検査の顕在・潜在指標の比較分析

ー形容詞版質問紙検査と潜在連合テスト(IAT)を利用してー

- 熊谷 隼 東洋大学大学院社会学研究科
- 杉山 憲司 東洋大学社会学部

P- 2307 性格を表現する言葉の使用頻度／当てはまり度

ー小・中学生用形容詞版Big Five性格尺度の開発に向けてー

- 杉山 憲司 東洋大学社会学部
- 高井 康晴 東洋大学大学院社会学研究科

P- 2308 対人苦手意識と社会的スキルとの関連

日向野 智子 東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター

P- 2309 ダイエットの段階と体型に関する他者評価への認知

鈴木 公啓 東洋大学大学院社会学研究科/日本学術振興会特別研究員DC

P- 2310 大学生における楽観性と日常的出来事に対する認知的評価との関連

- 河原 善人 川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
- 寺崎 正治 川崎医療福祉大学大学院医療福祉学部

P- 2311 外向性、神経症的傾向、日常生活出来事と主観的幸福感との関連

- 門田 昌子 川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
- 寺崎 正治 川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科
- 水子 学 川崎医療福祉大学医療福祉学部

- P- 2312 制御焦点と自己呈示との関連について(2)
○ 新田 静枝 岩手大学大学院人文社会科学研究科
堀毛一也 岩手大学人文社会科学部
- P- 2313 Sence of Coherenceとストレス対処の柔軟性との関連について(2)
○ 林 あずさ 岩手大学人文社会科学研究科
堀毛 一也 岩手大学人文社会科学研究科
- P- 2314 ハンスアスペルガー再考
ーアスペルガーが最初に報告した記念碑的四症例と自験例ー
清水 光明 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座
- P- 2315 聴覚投映法における諸指標の検討 ーBig Five性格検査を用いてー
松川 春樹 東北大学大学院教育学研究科
- P- 2316 自己像の不安定性と対人不安傾向、対人機能との関連性
角尾 美奈 東京家政大学文学部
- P- 2317 対人態度の親子間相関 ー内的作業モデル尺度を用いてー
○ 松岡 陽子 大同工業大学
黒石 憲洋 日本教育大学院大学
- P- 2318 快適夢見睡眠とパーソナリティに関する心理生理学的研究
松田 英子 江戸川大学社会学部
- P- 2319 学業達成場面における防衛的悲観主義者のポジティブおよびネガティブ感情
に関する検討
荒木 友希子 金沢大学文学部
- P- 2320 聴き方に関する考察
ーパーソナリティ理論のカウンセリングへの応用に関する一考察ー
○ 出口 光 NPO法人日本心理カウンセリング協会
榎本 和生* NPO法人日本心理カウンセリング協会
安生 裕治* NPO法人日本心理カウンセリング協会
廣岡 徹* NPO法人日本心理カウンセリング協会
- P- 2321 保育士のストレスとパーソナリティ研究
○ 西村 和久 桜美林大学大学院
堀 雅晴* 株式会社ネス・コーポレーション
堀内 友美* 株式会社ネス・コーポレーション